

2020 年度 入学式 式 辞

神奈川大学に入学された皆さん、また、更なる学問探究を志して神奈川大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。神奈川大学の教職員を代表して、心からお祝いと歓迎の意を表します。

また、今回はコロナ禍により、式典にご出席いただけなかった御父母の皆さま、関係者の皆さまにも、心からお慶び申し上げます。

本日、ここに多くの1年生の皆さんをお迎えして、学年暦の最終日となりながらも、学びて問う学生生活へ歩みだした慶びを共にすることができますことを、心から喜びたいと思います。

同時に、本日のこのときも、新型コロナウイルスから尊厳ある命を守るために奮闘努力されている世界中の医療従事者と関係者の皆さまに対して、1年生の皆さんと共に、あらためて心からの感謝の気持ちと敬意を表したいと思います。

皆さんにとって、この1年は、胸踊る新生活を始めるはずであったにもかかわらず、突然のキャンパス閉鎖をはじめ、対面授業からオンライン授業への変更、部活、サークルの活動停止、さらに、学友との出会いも無く、交流の自粛に伴う孤独な生活など、大変厳しい生活環境であったと推察いたします。唐突で理不尽とも思える、想定外のさまざまな状況とその変化にも、皆さんが良く対応されたことは、人としての成長の証でもあり、大変誇らしく思います。

さて、本学は、今年で創立93周年を迎えますが、創立者の米田吉盛が「人は実業家や学者、官僚である前に、まず人間であれ」と説いて以来、卓越した研究の叡智に基づく教育重視の伝統を堅持して、学問による「人づくり」に努めてまいりました。近年では、「約束します、成長力。—成長支援第一主義—」と表現したコンセプトのなかで、「人をつくる」高等教育機関としての誇りと自負を持って、1年生の皆さんを学問へといざなう準備を整えております。皆さんが、本学で、その能力を伸ばし、人として大きく成長するよう、私たち教職員も全力を尽くしたいと思います。

近年、大学の評価は、第三者機関による世界基準に則して示されるようになっていきます。たとえば、昨年秋にイギリスの高等教育情報誌である、タイムズ・ハイヤー・エデュケーションが発表した「T.H.E.世界大学ランキング」に、本学が世界の上位5%内の大学として再掲載されました。これは、本学が世界有数の総合大学の1つとして評価されたことを意味しています。この評価の根底には、本学の研究力と教育力の高さがあります。本学には、未来社会を先導する一流の研究者が集っています。大学の評価は、世界の基準では、入試の偏差値などではなく、社会に貢献できる研究力と教育力にあることを、皆さんも良く理解するようにしてください。

新世紀に入り、私たち人類はますます多元的な価値観と複雑な社会構造のなかで生きていかねばなりません。近年の歴史を顧みると、世界経済の行き詰まりを打破する役割を期待された「ワシントン・コンセンサス」と呼ばれる新自由主義的政策パッケージとグローバリズムの波及は、結果として、各国経済の破壊と現行の社会に想定を越える結果の不平等と新たな南北対立や社会の分断等をもたらしています。その上、気候変動に起因する地球環境問題が深刻化するなかで、国境を越える人類の課題がより複雑な様相を呈しています。

さらに、新型コロナウイルスの急速な蔓延は、世界中の人々を苦悩のなかに陥れ、世界は、私たち戦後世代が経験したことのない未曾有の危機の渦中にあります。

このコロナ禍に向き合い対峙する中で、これまで見過ごされていた社会システムの不備や内在する諸問題が浮き彫りとなり、私たちの社会には、多くの難題が残されたままであることを、図らずも思い知らされました。

このような状況だからこそ、皆さんには、本学での学びのなかで、ウィズコロナとコロナ後の新しい共生社会をイメージしつつ、「自ら考える力」と「世界の本質を見極める見識」を培う努力を継続されることを望みます。

本学は、2018年に、『ダイバーシティ宣言』を行っています。すなわち、本学は、世界の恒久平和と人類の幸福の実現に貢献できる良識ある市民を育成し、社会に存在する差別や偏見の根源的な解明と解決をめざすと唱いました。さらに、2019年には、国連で採択されたSDGsの達成に向けた研究・教育を推進するために、『SDGsへの神奈川大学のコミットメント』を表明いたしました。

貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和な社会など、持続可能な開発のために定められた SDGs は、本学が創立以来掲げてきた使命の実現と、その意義を共有するものと理解しています。

さて、本学での「学問」は、高校までの学習と違い、知識をただ学び取るだけでなく、文字通り「学び」、そして、「問う」、つまり、自ら考えて問うこと、疑問を持つことが求められます。これまで継承されてきた知識を、ただ受け入れるのではなく、その真偽を自らに問いかけ、自らのいわゆる血肉にすることが大切です。学ぶだけでは、他人の知識を代弁し、他人が築いた権威に安住するだけとなりかねません。また、学ばずに、問うだけでは、世界を知らずして、単なる主観を客観と錯覚して、自己肯定の独善に陥りがちになります。「学び、そして、問う」ことを真摯に繰り返し、教員と、そして学友との討論などを通して、主観による独善を乗り越えて、冷静に物事の「本質」を見極めることが求められます。大学は、教員と皆さんとによる、学び、そして、問う「共同作業の場」といえるでしょう。

一般に学問とは、積み重ねられてきた知識の中から自らの課題を発見し、その課題を解決するために、地道な調査や研究を行い、一つの仮説を提示、検証し、自らの新しい学説を提示することとされています。大学では、学者の研究内容に基づいて、さまざまな講義が行われます。研究者である大学教員は、自らの長年にわたる研究課題との奮闘とその成果をもって講義を行います。研究室の学者が、講義を行う時は教育者として、皆さんが本来持っている学ぶ意欲と知的好奇心をさらに伸ばすことを目指して教壇に立っています。

皆さんは、講義を通して、教員の研究に取り組む姿勢や、人類の幸福に寄与せんとする学者の精神にも触れることもあるでしょう。大学の教員は、遠い学生時代に、先学の学問への情熱とそのひたむきさに心を揺さぶられた経験を持つはずです。

大学の講義室は、連綿と続く人類の叡智の継承の場であるとともに、学問を志し、学ぶものの精神を含めた継承の場でもあるのです。

一般に、学問の目的は、「真理の探求と人類の生存条件の辛さを軽減することにある」とされています。あらゆる学問は、人類の幸福という公共性にかかれた学問として登場しています。英国の経済思想の泰斗であるジョン・ステュアート・ミルも青年時代の勉学は価値がある、すなわち、「人間性を高めるとともに人間社会の新たな問題に対処しうる能力を高める事になる」と述べています。

さて、本学には、アカデミック・ジャーナリズムをコンセプトとする『神奈川大学評論』という雑誌があります。1987年の創刊で、もうすぐ100号となる伝統ある雑誌です。その創刊号の特集は、「国際化社会と異文化の理解」でした。本学は、30年以上も前から国際化と異文化の問題について議論し、論壇をリードしてきた大学なのです。

この特集の巻頭に、当時の神奈川県知事の長洲一二先生と、本学の副学長を務められた平田清明先生との対談があります。そのなかで、長洲知事はこれからの国際化は、国家間の仕事と捉えるのではなく、Local to Local（地方と地方）、すなわち、地方がなすべき仕事と語られています。平田先生は、さらに個人が担う役割の大切さを論じられました。平田先生は、市民社会を論じた多くの著作を通して、常々、日本では、個人の人格の独立がほかの国に比べて遅れていると主張され、個人の復活と市民社会の成立を追い求めておられました。

成熟した社会とは、国家の成熟ではなく、市民である「個人」の成熟によるものだという主張は、現在でも傾聴に値するものだと思います。複雑で困難な諸問題を抱える国際化社会の担い手となる皆さんは、本学での学問を通して、人として大きく成長して、一個の独立した個人として、希望ある未来に向けて皆さんなりにそれぞれの課題に向き合って欲しいと思います。

神奈川大学の歴史を紐解けば、平田清明先生をはじめ、大熊信行、網野善彦など、数々のすぐれた教員を輩出しております。こうした先学に共通していることは、本質を求め真理に対して「質実剛健・積極進取・中正堅実」に研究と教育を極めんとした点にあります。神奈川大学の研究と教育は、自由にあるべき姿を建学の精神よろしく独立して考えることを旨としております。この点からも神奈川大学は、日本の誇れる大学の一つであるとはっきりと申し上げます。

本学は、1年生の皆さんが、これからもしっかりと学問に取り組むとともに、新たな友人と出会い、語らい、課外活動等の様々な可能性に挑戦するなかで、人として成長し、皆さんしかできないことを見い出して、独立した個人として社会に船出するために最高の教育と環境を提供してまいります。

最後になりますが、1年生の皆さんが、「人をつくる」大学である神奈川大学の学生としての誇りと自信を持って、健康に心がけて、実りの多い学生生活を過ごされますよう心より祈念して、私からの式辞といたします。

令和3年3月31日
神奈川大学長 兼子良夫